

シリーズ連載「生きて 逝く」に寄せて

今回は、10月1日から高知新聞のトップページで連載されているシリーズ「生きて逝く」の掲載内容について、私が抱いた想いを共有させていただきます。

連載では、主に以下のテーマが取り上げられています。

- 葬儀のあり方（特に生前葬について）
- 墓じまい（永代供養）
- 老後お一人様の就活（エンディングノート）



「生前葬」から考える死のタブー視

「生前葬」については、私自身深く考えさせられるものがありました。

終末期医療の重要性を訴える尼崎の長尾和宏院長は、還暦の際に、ご家族、ご友人、病院関係者を招いて生前葬をされました。「一度、棺の中に入って、死者の体験をしてみたかったんだよな」という、茶目っ気たっぷりの先生です。

長尾先生は、生前葬を行った大きな目的を次のように語られています。

「僕が生前葬にこだわる大きな目的は、死を身近に感じてほしいということ。人は全員死ぬのに、寿命が延び、身近で人の死に出会うことも少なく、死は人の事と捉えがち。誰もが自分だけは死なないと思っている。

私が「予行演習」することで、死をタブー視せず、オープンに語り合うきっかけにしてほしかった」

命と心に寄り添う関わりを

私たちが関わらせていただいているご利用者さまに対して、身体の状態把握はもちろんのこと、特に心の状態や孤独感、そして終末期についてどう考えておられるのかという気持ちを汲み取る関わりができることが重要だと考えます。

そうすることで、お互いの命が共鳴しあい、深い信頼や絆が芽生えるように思います。

人生の道のりの中で、私たち自身も様々な苦難に遭遇することがありますが、苦しみを体験した人は人に何倍も優しくなれます。私はそう信じていますし、そう思うことで、私自身が救われているからです。

「みのり会」の相談業務

「死」から生といのちを考える場として「みのり会」の発足をしたいと、構想を練っているところです。ご利用者様や共に働くスタッフ、そして広くは地域の方々と共に学び合いたいと願っています。

超超暑い中、今月も頑張ってくださいました皆様に心より感謝いたします。

2025年10月10日 呉 静恵

